

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	村上桃子
論文題目	『古事記』中巻末の構想に関する神話論的研究		
（論文内容の要旨） 三巻構成をとる『古事記』は、上巻に神々の代、中下巻に天皇の代を記す。内容は実質上巻と中下巻に二分されるようにみえるが、本論文は三巻構成をとることの意味を個別の譚の分析を通して問う。『古事記』は本文と歌謡という二つの表現方法をもつ。本論文はその双方をそれぞれ対象とする。 論の主軸となるのは応神条に記載される四つの譚である。第一部「ふたつの婚姻譚—歌謡を中心に—」では、応神天皇と丸迹氏の女、矢河枝比売との婚姻、そして下巻冒頭で仁徳天皇となる大雀命と日向国諸県君の女、髪長比売との婚姻が、それぞれ歌謡を伴い連続して記されることの意味を問う。第一章「角鹿の蟹の歌（記42）」では、この歌謡が、萬葉集巻十六の蟹に扮した乞食人の歌の詞章を取り込んだものとする従来の説に対し、天皇が歌うとある所伝にそぐわないという問題点を指摘する。歌のモチーフである「蟹」の象徴的意味を考察し、仲哀条で角鹿の土地と応神天皇との密接な関わりを描く気比大神譚と本譚の関連を説き、応神天皇が蟹に自身を託した意味を明らかにする。即ち、宮主矢河枝比売との婚姻を通して、応神天皇は宇治川水系の支配権を確立すると考えられる。また歌謡の後半部には嬢子の形容としては不自然と考えられる詞章が存在する。そこで歌の語句分析と道行表現の意味を考察し、当時巨椋池を中心とした水運の中継地点として栄えた宇治の地理的条件を把握することで、不自然とされる形容は嬢子を氏族的特徴と土地に基づいて讃美する表現であることを論じた。 第二章「いざ子ども 野蒜摘みに（記43）」では大雀命と髪長比売の結婚の際、所伝にはみられない野蒜摘みの光景を応神天皇が歌うことの意味を、雄略天皇が菜摘みの嬢子に求婚する『萬葉集』巻一卷頭歌のように、上代文献にしばしばみられる野での求婚というモチーフの考察を通して明らかにする。野での求婚譚を『古事記』の構成において捉えたとき、中巻冒頭の神武条との関わりを見出すことができる。即ち、下巻冒頭に即位する仁徳を中巻冒頭における天皇の開祖神武に倣う位置づけによって、新たな時代の始発を祝福する意図が認められる。 第二部「下巻への神話」では本文部分で、「昔」と時間設定された中で語られる二譚、新羅の王子の渡来と倭の神々の物語を取り上げる。両譚は応神条の文脈と直接かかわらないためその位置づけが困難とされているが、本章ではそれが下巻のために用意された神話であると論じる。二譚は上巻に多くみられる神話特有の思考方法に基づいて記される特徴を有している。本論はその表現方法の分析に重点を置く。まず第三章で論じる「天之日矛譚」は、従来、新羅から渡来した王子の子孫の系譜に新羅親征を遂げた神功皇后の母が載ることから、親征につながる「神話」と捉えられていた。しかし親征は中巻に記されるのであり、この神が後に記されるのは不自然である。本論文は、「天之日矛譚」が中巻末に位置すること、天之日矛や阿加流比売神という日にかかわる名義を有する神の譚であることから、「日の御子」と讃えられる仁徳天皇のための神話としてあることを論じる。譚の中の牛殺しのモチーフは豊饒予祝の儀礼の一環であり、それと結びつく阿加流比売神もまた食糧神として豊饒を司る女神であると指摘する。さらに阿加流比売神の行動パターンは天人女房の話型に則ったものであ			

ることを明らかにし、受難の果てに難波の地に鎮座することは、下巻冒頭で都が置かれる難波を良き地として祝福する意味をもつと考える。また一方の天之日矛の渡来は、聖帝仁徳の版図が新羅にまで及ぶことを保証すると論じた。

次に第四章で、「秋山春山譚」は前の「天之日矛譚」に比して抽象的な意味を担うと論じる。春秋は風雅の要素以前に農耕の周期をあらわし、母親が春山之霞壯夫にのみ婚姻の協力をするのは、兄弟のうち「春」を司る弟のみが繁殖の力を持ち、嬢子を懐胎させることが可能であることによる。一方「秋」を司る兄が八年の間病み枯れたのちもとの如く戻るのは、死と再生というモチーフに基づき一年が終わり新たな年が再生される周期的再生の神話的表現であることを指摘した。本譚が中巻末に記されることは『古事記』の三巻という構成に深く関わる。天皇の時代として中下巻が連続するにあたり、上巻から遠く隔たった下巻冒頭のため、豊饒を予祝し新時代を創出する神話が用意されたのである。

第三部は「上巻末の構想」として、第五章「葦原中国と海原」において上巻末の海神宮訪問の後日譚について論じることで、第二部の中巻末の構造理解への一助とした。海神の娘が「海坂」を塞ぎ海に帰ったという記述について、従来この神話的異郷との断絶関係を象徴的なものとみて、神話的世界の終焉と天皇支配の時代の開始を読みとることが多かったが、「塞」の字の訓詁と『日本書紀』との比較により、断絶ではなくむしろ繋がりを示す譚であることを主張する。上巻末には、巻の終わりにあたり、系譜と予祝を主題とする次の巻への神話としての構想をみることができる。その構想は、さらに中巻末の構想に繰り返される。

結「中巻末の構想」では、以上のように初代天皇への遡源と反復、「神代」の再構成によって、かつて中巻が上巻を直接承けて展開したように、下巻も同様にこれら中巻末の神話に裏付けられて展開されることを指摘する。『古事記』の三巻構成には各巻が時代意識をもちつつ次の巻への神話たろうとする、その積み重ねにより新たな時代を拓く重層的な神話のありようを見ることができる。そしてそれが『古事記』編纂時の今に至る皇統を根拠づける方法として選択されたと結論づける。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、従来の捉え方と異なり、『古事記』中巻から下巻への展開を三巻全体の構造の中に位置づけることを通して、中巻のあり方に新しい視点を与えるものである。その成果は、以下のように評することができる。

『古事記』は、序文に続く上巻、中巻、下巻の三巻から成る。上巻は天地開闢から天孫降臨までの神代のこと、つまり神話を内容とし、中巻は神武より応神に至る天皇の事跡、下巻は仁徳から推古までの天皇の御代の出来事を記すという構成である。通説では、中、下巻は代々の天皇の歴史として一括され、上巻と相対するものとして扱われてきた。

本論文は、それにまず疑問を呈する。同じく天皇の御代を記しながら、『古事記』はなぜ中巻と下巻を分かつのか。二つの巻には連関しつつ展開する、構造的な分節があるのではないのか。

論は大きく三部に分かたれる。第一部「ふたつの婚姻譚—歌謡を中心に—」は、歌謡の分析から、下巻の始祖天皇仁徳の父であり、中巻最後の天皇である応神の位置づけを試みる。第二部「下巻への神話」は、中巻末に載る二つの、『古事記』の天皇の代を追う展開からは一見逸脱して見える、「昔」で始まる二つの譚の展開上の意義を論じる。そして第三部「上巻末の構想」は、上巻末の天孫降臨部分のあり方を解析して、中巻から下巻への展開がそれに照応するものであることを論じ、もって『古事記』が三巻構成をもつことの構造的意味を明らかにする。

以下、具体的にそれを論評する。

第一部の応神は、天皇の系譜を論じた吉井巖によって、仁徳に架上された、実在しない天皇と判定されているように、仁徳の聖帝としてのあり方を根拠づける存在と考えられる。本論文はその根拠を応神条の二つの歌謡の分析によって与えようとする。第一章「角鹿の蟹の歌(記42)」は、「この蟹や いづくの蟹」と現れた蟹が、「わがいませばや」と自称敬語の語法で、天皇として宇治木幡で和迺氏の嬢子に求婚することについて、これが、氣比大神と名の交換を通して神話的な同一性を有する応神と角鹿の地との、蟹を通した関係を示すものであり、さらに嬢子が「宮主矢河枝比売」と称するところに、この嬢子の宇治川から巨椋池一帯の水系に関わる巫女性を見る。それとの婚姻を通して、応神はこの一帯に君臨するのである。歌謡の中で、嬢子の賛美としては異例の表現も、その地理的条件に基づいて、賛美性を解することができる。応神はここで神話的に語られている。

第二章「いざ子ども 野蒜摘みに(記43)」では、応神が野蒜摘みを歌うことを、上代(七、八世紀)日本の文献に散見する野における求婚(例えば萬葉集劈頭歌、雄略の求婚)として捉え、そして応神の求婚した髪長比売を大雀命、後の仁徳に譲ることを通して、この歌謡が中巻始め、神武の野における求婚に倣う意味をもって、下巻の仁徳に、中巻始発における神武と同様に祝福するものであることを説く。

以上第一部の二章は、『古事記』が応神の神格化という方法によって、仁徳を一つの劃期とする下巻を設けているあり方を、説得的に論じている。

第二部は、「昔」で始まる中巻末に記される二つの譚について、それが下巻に、応神から仁徳へという系譜とは別の「神話」を付与しようとするものであることを論じる。

論文中に引用されるように、「昔」という語り出しは、敦煌変文などに跡を残す中国説話に見られる語法であることが小島憲之によって明らかにされている。その恣意的な時間性は、日本語でム

カシと読まれる意義と照らし合う。蓋しイニシへ（古）とはイマ（今）に対して根拠となる歴史的な過去であり、ムカシとはイマを規定することのない、イマに対して恣意的な過去である。それ故に、ムカシという設定は、独自の物語の時間を構成する。中巻末の二つの譚、第三章にとりあげる「天之日矛譚」と第四章にとりあげる「秋山春山譚」は、下巻へ系譜的に続くのではない。

まず第三章「天之日矛譚」について。従来、神功皇后の母が天之日矛の系譜を引くことから神功の新羅親征に結びつける解し方があったが、本論文が批判するように、それでは中巻末に位置することが説明されない。本論文はむしろ、天之日矛が新羅から日本へと追って来た阿加流比売神に注目する。太陽に感情して出生したこの神は、日本に来て、難波に鎮座する。その難波は日の御子と称えられる仁徳の都となる。その点で、この神は仁徳を予祝するにふさわしい存在であり、また牛殺しのモチーフも加わって、豊穰予祝の存在でもあると説く。「天之日矛譚」は、本論文によって新しい位置づけを得ていると言えよう。

第四章「秋山春山譚」は、秋山之下氷壮夫、春山霞壮夫兄弟の妻争いと、母親の関わりをめぐる譚である。この母親は一方的に弟の春山に加担し、弟は、天之日矛によって将来された神宝の神の娘伊豆志袁登売と結婚する。敗れても約束の品を渡さない兄の秋山を母親は呪法で罰し、この兄は八年間萎え病み枯れる。この譚に説得的な解釈は存在しなかった。本論文はここに死と再生に関わる神話的モチーフを見ようとする。即ち春を司る弟は繁殖の力をもち、嬢子を懐胎させる。兄の秋山にその力はなく、かえって万物が枯れしぼむ凋落の季節に就く。そして兄は、八年という長い期間の後ではあるが、許されて再生する。この懐胎そして一方での死と再生に、豊穰予祝を捉えるのである。この解釈はまだ荒削りの感があるが、斬新な解し方として評価してよい。ただ、天之日矛及びその神宝の系譜がここに与えられると言っても、それは下巻の仁徳に直接するのではない。これは天皇の系譜に対して、言わば装飾的に位置して、仁徳の時代に神話の彩りを添える。「昔」という始まりはまさにそれにふさわしい。その更なる解析のためには、従来直接的に説かれすぎたきらいのある神功の系譜、即ち息長氏との関わりをあらためて綿密に検討することが必要になるのではないのか。次の課題であろう。

第三部は、第五章「葦原中国と海原」のみで構成される。第一部第二部を通して説かれてきた、中巻から下巻への展開が照応を求めている上巻から中巻への展開のための、上巻末尾が取り上げられる。火遠理命と海神の娘豊玉毘売との婚姻譚の中で、本つ国の姿、八尋和迹となって出産するところを見られた毘売が海坂を塞いで海に還る場面は、通説的には海の世界と葦原中国との断絶によって、神話の巻が終わり、中巻の天皇の時代が始まる象徴的な意味があると考えられてきた。しかし、本論文は、毘売の妹玉依毘売、即ち神武天皇の母が両世界を通行することから、海坂を塞ぐという「塞」はここで結婚関係の解消を意味するとして、両世界が断絶したのではないとする。それを「塞」字の訓詁から展開する方法は正確で説得的である。天孫降臨以後の上巻末尾は、天孫と山神の娘木花之佐久夜毘売との結婚、火遠理命と海神の娘豊玉毘売との結婚を通して、天つ神の系譜が葦原中国及び海原と結ばれ、地上の支配権を得るという筋を準備し、中巻の神武の天皇としての始発を根拠づけると説く。上巻と中巻の関係の捉え方として至当である。

結「中巻末の構想」は、中巻末も、上巻末が初代天皇を根拠づけたのと照応して、下巻の始発である仁徳の治世へと展開すべく構想された、やはり神話的な質をもつことを明らかにした。

この結論に至る本論文の全体は、神話を新たな捉え方で論じる方法と相俟って、説得力をもった

斬新で魅力的なものであると高く評価される。

よって、本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年1月17日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降